

方言助詞集(格助詞篇)

—九州—

甲南女子大学方言研究会(編)

本稿は「甲南国文 第二六号・第二七号」所載の「方言助詞集(格助詞・接続助詞・副助詞篇)——近畿・中国・四国——」

「方言助詞集(終助詞篇)——近畿・四国——」に続くものである。

九州には格助詞に種々特色があるので、その記述も長くなつたものが多い。

九州の方言研究は九州方言学会をはじめ非常に進んでいるのでその研究書も多く私どもには目を通すことのできない書が多いが、今回は次の書からとった。今回の資料とその略号を記す。

【方言学講座 第四卷】(東京堂)——略号(コ)

【九州方言の基礎的研究】(九州方言学会・風間書房)——(九)

【九州のコトバ】(吉町義雄・双文社)——(九コ)

【福岡県地域方言の研究】(都築頼助・自家版)——(フチ)

【福岡県内方言集】(福岡県教育会・国書刊行会)——(福方)

【長崎方言集】(本山桂川・国書刊行会)——(長方)

【村馬南部方言集】(滝山政太郎・中央公論社)——(ツ)

【大分県方言の研究】(三ヶ尻浩・朋文堂)——(大方)

【肥後の方言】(秋山正次・桜楓社)——(ヒゴ)

【熊本方言の研究】(原田芳起・日本談義社)——(ク)

【大隅肝属郡方言集】(野村伝四・中央公論社)——(大隅)

右の略号は、各記述の末尾に記したものである。

資料の原文を、全体的に調えるため記し方を変えたものも多
いことをお断りする。

【が】(の)

九州總括・主格を表示する助詞「ノ」「ガ」のうち、「先生ノ来ヤッタ」などのように、「ノ」の方に敬語を托す地域がある。薩隅地方は、その著しい地域の一つである。この用法は、日向の山地帯から肥後南部へ、さらには筑前・筑後の西寄り一帯へとたどられる。が、これも全般に淡くなりつつあり、特に、肥後を含む北東部地方にあつては、概して無自覚で、むしろ、「腹ノ(ン)ヘッタ」など、「ノ」専用の現象がきわだたしい。

島原の一青年は「先生ノ来ラシタ」よりも「先生ガ来ラレタ」を、上品な表現として意識している。「来ラシタ」「来ラレタ」の差もさることながら、主格表示の「ガ」を、共通語意識に支えられてか、より上品としている点が、新しい動きとして注目される。

筑前の東部から日向の海岸部一帯へかけては、「ガ」が専用される。(豊後南部には、「雨イ降ッタ」などの「イ」がある。)

敬体の「ノ」と常体の「ガ」との併用地域——薩隅地方が、一段の古態を示すのに対して、「ガ」専用の豊日地方は、また、一段の新化状況を示すと見える。(九)

福岡・「方言学講座」につきの表が出ている。

意部	対応	共通語	対応する方言	特殊な用法、接続、語形、機能
----	----	-----	--------	----------------

目標格	対格	連体格	主格
○	を	の	が
サイ・サニ・	をバ(バ)	が	(ン)
「様」に由来すると見られ、伊と関係があるか。	筑前・筑後では、直接対象格を特に明瞭にするためには「ヲバ」、または単に「バ」を付ける。「火バ入れる・本ヲバ持つて来い」等。単に「ヲ」を用いるのは、豊前である。共通語でも「に・へ」はあまり区別がなくなつたが、筑前・筑後では「花イ水バかける・雀イ餌バヤル」の様になつてゐる。記・万の	平安朝以前の古格を残存。「雷ノ降りよる・犬ノ寝とる・雨ノ降つて来た」等。「梅が枝」等の成語のほか「あれが家・兄貴が金バ」の様に人物を示す名詞・代名詞につく。	伊と関係があるか。

○
サネ・サン
「に・へ」と同じ様に用いられるが、強勢を帯びている点に差がある。(筑前・筑後)
「見ガイ行く・見ケー行く」といった様に連用形の体言化した場合に現われる。

福岡・県の東北域はガ、佐賀県・熊本県に近い地域はノ、その間の地域はノ・ガ併用である。併用地域ではノを敬、ガを卑に使いわけるのが本来であるが、ノの勢力が強くなって敬卑の別の乱れが見える。一方、感動表現にはノ、客観的な叙述文にはガと使いわけられることもあるようである。(九)

佐賀・豊崎・主格・所有格を示すのに「ガ」と「ノ(ン)」が併用される。「ガ」は、一人称や不定称、二人称の場合の卑称に用いるから、いくらか待遇上の差が認められる。ただし、他と比較する場合の主格には「ノ」は用いず「ガ」である。(コ)

佐賀・主格を示す格助詞ノとガについて、ノの方を敬意度が高いとするのは鳥栖地区のみである。例、先生ノコラツシャツタ・ハツチャー(こじき)ガキタ。

他の地区では主格にはノ(ン)を用い、特にガを用いるのは、

①他との比較において主格を示す場合、例、イヨリーガ、②代名詞をうける場合、例、オイガ(おれが)、ダイガ(だれが)、などである。(九)

佐賀・「ガ」による主格表現は次のようにおこなわれる。

アタシガ イカジャ。私が行こう。

オイガ カエツタ トキ。私が帰った時。

ダイガ イチヤツタ。誰が一番だった。

このように、自称、および不定称の代名詞は、だいたい「ガ」をとりやすい。この傾向は、「ノ」の、敬意の認められる用法に、あい対するものである。「ガ」表示に、何がしかの、謙遜の意識がうかがわれる。

ドツチカ ユーナ イデン ホーガ マシ。どちらかとい
えば、出ない方がいい。

ムカシントガ ヨカ。昔のがいい。

一般に、上のような、比較法に立つ表現の場合など、いわば、主格の、強調・特説の意識の動いた場合には、「ガ」がおこなわれやすい。

ナカナカ ソレガ テケン モン ナンタ。なかなかそれが
できないものねえ。

コイガ クロカ。これが黒い。

このように、また、指示代名詞の格は、「ガ」によって表示されやすい傾向がある。これも、現前の、具体的な事態に対する、話し手の関心の深さに起因しよう。

「カ」による主格表現は、「ノ」によるそれに比して、用法が限られており、使用頻度も、比較的低い。(九)

長崎・県内では、主にノが使われている。カを使っているのは、上対馬・豊玉・巖原・深堀・島原・口之津で、大部分は「先生ノ・乞食ノ」とノを区別なく使っている。(九)

長崎・撰撰……ヤメタホーガヨカロウ(止めたがよかろう)。

指示……アヤツガ居ルケンイヤ(彼奴が居るからいやだ)(長方)

大分・主格は、終止法に対するとき、Xカであるが、県南ではXイ(これは融合をおこさない)、県北ではXグが併用される。

雨イ降ル、花グ咲ク。イ・グの現われるのには、音韻上の制約がある。(九)

大分・主格「グ・イ」「老」「少」「腹グヘツタ」の「グ」が豊前前に、イが豊後南に分布する。老少二層ともほぼ同称。(九)

大分「ガ」はこのままの形も盛んに行なわれるが豊前では「ア

「エ」「オ」に続く「グ」となり「花グ咲ータ」、豊後では「イ」となり、「風イ吹ク」(朝鮮語とは無関係)となる。(九)

大分・宮崎北部・主格のイは—N—Ci—Cuに終る語に

は付かず、かわりにカが付く。また「……がよい」をイイーとは言わない。必ずイガイーと言う。イは、しかし一モーラの名詞にも付きうる。(子イ泣キヨル)。このようなイは大分南部だけに聞かれるものである。土師で記録した例。

ウチン シゴツ ヤンノイ ソレイ イチバン ラクチャー。
傾向²²⁵ン方ニ チッター 雲イ サワカー サワケント(騒ぐことはさわぐが)。

イマ 降りヤー コメドーライ 降ノド、米俵イ……土師では、ノを終止法動詞の主格に用いることはないが、大分では日田地方で、宮崎では各地で聞かれる。

妻で、先生ノ来ヤツタガ(中・女)と言ったのを聞いた。カに対して敬意がある。(コ)

大分・宮崎北部・いわゆる助詞の融合形をさかんに用いる。「聞きわけられぬ豊後もの言ひ」(俳書「其便」)と評せられるのは、主としてこれがためである。いま、名詞に、「を」「に」「は」に当る助詞の融合した形式を表示する。主格形式もあわせてかかげよう。

	(一々)	(一々)	(一)	(一)
夏	natuga	natur	natw ir	natar
猫	ne'ko'i	ne'kur	ne'kwir	ne'kar

～(準体詞)～no¹ i ～nu¹ r ～nwi¹ r ～na¹ r

顔 ka^oi ka^ur ka^{wi}r ka^war

山 jama¹i jama^r jama^r jama^r

川 ka^wai ka^or ka^wer ka^war

小屋 ko^{ja}i ko^{jo}r ko^or ko^{ja}r

箱 kaneⁱ kan^{ju}r kanⁱ kan^{ja}r

鳥 tori^{ga} tor^{ju}r torⁱ tor^{ja}r

盆 bo¹nga bo¹nu bo¹nai bo¹na

(トナリカ)
オ・ニ・ワは「モーラの名詞」R, —i, —ju, —joに終

る語には融合しない。(コ)

熊本(格助詞のノとガ)動詞を中心とする「物がたり文」(従

属句主語はもちろん)では、

A 下ン狭カ座敷ニ、雨ノ(ン)漏ツトル(バイ)。

B 夜ナキヤ一 雷ノ降ツド一。(雷ノ降ツトタロ)。

C 子供ノ泣キヨルバイ。

のように主格助詞は(ガを用いてもよいが)基本はノである。

Cの場合に一番はつきりするような体言区的表現、従って余情的、喚体呼格体風で物語文が表現される。自動車ノ来ルソなども同じ。オソロシー。マア、金ノ要ルコツカノ、トテン気持ノ良サカナ一等の情緒的表現が物語文全体の筋になっている。

が「シタ式」の述体表現になりきれぬ点に、ノが用いられる因がある。

性状規定・判断指定の「品さだめ文」(下に形容詞又は断定辞をとる)においては

A 医者ドンニ早ヨオ診テモロオタ方ガヨカ。

B オッカサンニ怒ラルツトガ一番オソロシカ。

C 田中クンガ一番ダツタ。

の如く、ガに決っており、ノに替えられない。例えばCをノに替えれば、田中君ノ一番ダツタモン(一ダツタバイ)のような喚体の感動的表現の物語文に変質する。トテン気持ガ良カは判断の品さだめ文であり、トテン気持ノ良カは気持ノ良イ事サヨに近い物語文になる。

そして熊本地方における物語文的表現の優位がノの勢力とつながる。(この傾向は、南島方言の陳述表現力と類似する点が認められる)

ほかにノ・ガの待遇上の差は、意識として、は不明確だが現象としては存する。オドンガ捨テタ本 アヤツガ悪カッタイのガはノにならず、先生ノ言イナハツタタイのノはガにならぬ。一方ガの領格用法も共通語に比して強い。ア奴方嫁、ワタシガ親父、ヌシガ家など。(コ)(ヒゴ)

熊本・〔ガの終助詞的性格〕ガは共通語の主格助詞としての用法に限度があり、接統助詞の用法は、バッテン、テに替えられて振わず、ただ念をおす気持、強い余情表現（終助詞と言つてよい）に盛んに使われる。イダロガ、イデシヨウガ、と畳みかけるような、教師が生徒に念を押す時に基本的に用いる式の強圧的表現である。金田一春彦氏が「テスモンネとイデシヨウガの連発、このガは「九州的」にズキンズキンとこたえる、またいやとは言わせぬ勢で、「方言の威力」をおしつけると言われた（「ことばの四季」）「ガ」である。（コ）

熊本・（ノ・ガ）当方言の主格助詞としてはノとガがある。ただし、ノとガとの間には、構文論的にかなりはつきりした使い分けが認められる。

〔1〕核文では、その文中の述語句に体言句を含まないばあいの主格助詞はノであり、含まれるばあいの主格助詞はガである。

(注) 核文は構文論における記述の単位となるべき文である。筆者(秋山)は当方言のその種の文に該当する、次のような七条件を考慮している。

- (1) 喚体的な文でなく、述体的な単文。
- (2) 必須成分と随意成分とからなるが、必須成分を欠かない文であること。

(3) 必須成分としての主語句と述語句を完備する文であり、かつ述語句が主語句に先行することがないような文であること。

(4) 動詞・ある種の形容詞・カ語尾形容詞が述語となる文では、必須成分としての客語句を含むことがあるが、客語句の成分として、格助詞バ及び、限られた格助詞ニのいずれか、またはいずれれをも含むこと。

(5) 核分は随意成分を含んでも含んでいなくてもよいが決して、過去に変形歴史を持つようなエセ随意成分(例、形容詞の連用形・動詞の連体形)を含まないこと。

(6) 必須成分としての主語句の成分として、格助詞ノ・ガを含み、決して係助詞ワを含まぬこと。

(7) 必須成分としての述語句の成分となる動詞・形容詞・形容動詞・コビュラ句はかならず、終止する終止形の形をとり、助動詞・助詞・補助用言の類を後続させないこと。

上述の条件にかなう、当方言の文を集めて検討すると、核文では、述語句中の体言句の有無で、構造的に、明らかに使い分けられていることがわかる。

- i オキヨノ アガル。(お経があがる)
- ii アライゲノ イタカ。(トゲがいたい)
- iii ヨメガ ビエンバ サクライデスル。(嫁が生魚を桜ゆでする)
- iv アサミガ シモヒラヨリ チート トーカ。(浅海が下平

より少し近い)

v ニヘーサンガ クチョーヂヤ。(仁兵衛さんが区长だ)

(注) 二重線のある部分が体言句。

偶然的な発話では、述語句中の体言句を省略することがあつたり、主語句との位置が転倒していたりすることがある。しかし、そのばあいでも、主格助詞ノ・ガの使い分けに関する(1)の規定は有効である。

vi ヤツバリ ヒヤクショウガ(リョーシヨリ)ウーカ。(やはり百姓が多い)

vii シモヒラヨリ アサミガ チート トーカ。(下平より浅海が少し遠い)

(2)核文は変形をこうむると派生文となつてより複雑な構造を持った文となる。そのばあい、加えられる変形の種類によつて、(1)に規定された二種の核文の主格助詞ノ・ガは転換を要求されることがある。

(2) (1)の規定によるガを主格助詞とする核文が尊敬待遇の変形をこうむつて、できあがつた派生文の主格助詞はノに転換される。ノを主格助詞とする核文が同じ変形をこうむると、できあがつた派生文の主格助詞は転換されずに、ノで示される。尊敬待遇の派生文中の主格助詞は常にノで示される。

i ヨメサンノ ビエンバ サクライデサル。(嫁さんが生魚を桜ゆでなざる)

ii セエンセエイノ ミナマタサン イカツタ。(先生が水俣へ行かれた)

iii ニヘーサンノ クチョーデアラス。(仁兵衛さんが区长でいらつしやる)

iv ソンシノ ミゲラシユー アラス。(その人が可哀想でいらつしやる)

v ジーサンノ ヒラマツタ。(じいさんが泣かれた)

(3) (1)の規定によるノを主格助詞とする核文が単遇変形をこうむると、できあがつた派生文の主格助詞はガに転換される。ガを主格助詞とする核文が同じ変形をこうむると、できあがつた派生文の主格助詞は転換を要しない。単遇派生文中の主格助詞は常にガで示される。

i ワツドモガ ギヤーギヤー オクメ。(お前たちが、がああ叫ぶ)

ii ンドンガ ツコクル。(おれがつまづき倒れる)

iii ウンダーガ クワセモス。(おれが食べさせる)

(3)核文中の述語を体言化する体言化変形のばあいにも、主格助詞が転換されることがある。

(4)(1)の規定によるガを主格助詞とする核文が述語体言化の変形をこうむると、できあがった派生文中の主格助詞はノに転換される。ノを主格助詞とする核文が同じ変形をこうむると、できあがった派生文の主格助詞は転換を要しない。述語体言化の派生文中の主格助詞は常にノで示される。

i オキョーノ アガリ(カタ)

ii アライケノ イタサ

iii ワリノ イオノ ツリ(バシヨ)

(5)主格助詞ノ・ガによる二種の核文がより大きな文中に投入されて連体修飾句を作る変形では、できあがった派生文中の主格助詞はノ・ガのいずれでもよい。

i ヒデコガ ツレギヤー キタトジャツカ。(秀子が連れに

来たんじゃないか)

ii オルドンノ シランシナモンジャモネ。(おれたちの知ら

ない品物なものなあ)

以上、ノ・ガの使い分けによる四つの規定のうち、もっとも重要なのは(1)の規定である。なぜなら、(2)以下は(1)を前提とした規定だからである。実際の発話では、(1)を基礎としながら、(2)以下の規定が相互に絡み合ったり、合わなかつたりで、より複雑な相を見せている。更に多くの規定が必要

かと思われるが、ここでは、一つの考察の試案を示すにとどめておく。(九)

宮崎・西臼杵郡では「ガ」の外に「ノ」を使う。中年以上では主格の「ノ」は頻出する。原則として、目上の人物が主語となる場合は「ノ」を使う。こうした使い分けは、他にも散在するが、次第に崩れて来つつあり、少年層には存しない。(九)

鹿児島・ノは敬意を含むが、ガは常体を示す。ノには述部に敬意表現を伴う。オ父サンノ来ヤツタ。しかし、一般に青少年層はこの区別を失っている。また敬語表現の発達してないころは、ノを用いずガである。すなわち出水地方沿海地、揖宿郡の農村、大隅尖端部、屋久、下飯などは、もともとノ・ガの区別がないところが広い。(九)

奄美大島・(ガ)(イ)共通語の「ガ」に当る。

方言の人代名詞一人称と二人称の場合に限って、

ワガ カキエン(吾が書く)。

イヤガ シリイ(「Zigafiri」) (お前がせ)。

アライ(彼)、タル(誰)、が主語のときは、次のように「 ツカ」となる。

アツカ スンチ(彼がするつて)。

タツカ イシヨ(誰か言ったか)。

(ロ)動詞の目的を表わす「に」に当る。

方言で動詞「イキユン」(行く)の目的を表わす語が、動詞から来た名詞である限り「チ」を用いないで、「ガ」を用いて、共通語の「に」の役をする、特殊な「ガ」がある。

アシジガ イコヤ(遊びに行こうか)。(コ)

〔の〕単体助詞を含む——「準」と記す(ガ)

福岡・標準語ならば「ガ」の助詞を用いるべき場合に「ノ」を用いることは、平安朝の残存するものとして、その訛形の「ン」と共に注目せられているが、福岡県地域内では著しく「ガ」の勢力が強まっていると謂える。(フチ)

福岡・(準)筑前はト、筑後はツ、豊前はンで接境域では併用されている。築上郡の沿岸部ではオリガン・オレンガンと、ノン・ガンを言う。村岸、山口県のソ(ス)が北九州の大部分と京都郡・行橋市および筑上郡の城井川流域に行なわれるが主勢力はンである。(九)

佐賀・準体助詞「の」は一般にはトとなるが、東松浦地区と鳥栖地区ではツを用いる。例、私のもの√オトガト(佐賀)、オリガツ(東松浦)、オルガツ(鳥栖)。(九)

佐賀・長崎・「ノ」は先行語の制約がなければ「ン」になることがおおい。先行語の語尾がnや長母音の場合及び先行語が一拍語の場合には「ン」にはならない。(コ)

佐賀・長崎・形式名詞「の」は「ト」になる。共通語で同語形をとる格助詞と形式名詞の「の」が、この地方では「ノ」と「ト」に区別される。

トフノハヤカ(飛ぶのが早い) オイガト(僕のもの)
タツカト(高いもの)

佐賀県東部地方や東松浦地区では、この「ト」が「ツ」になり、島原地方には「チ」を用いることもある。シロカケ(白いもの)。(コ)

佐賀・「ノ」の、主格表示の用法が注意される。

カンイサンノ オイデンテツ。神様がいらっしやる。

トシオイノ イワス。年寄りが言われる。

ハシノ ナガルン モンジャ。橋が流れるものだから。

アメン フツテ キタ。雨が降ってきた。

このように、主格は、「ノ」(ン)によって表示されるのが普通である。「ガ」表示の表現も、いくらかは見られる。「ノ」「ガ」表示の表現の間には、若干の特質の差も認められる。例えば、上の第一・二例でも、「ノ」格表示の「主部」が、「述部」の敬意

表現(インサル・イスによる表現)と、呼応して存立している。このように、「ノ」格表現が、いずれの場合でも、敬意をになつてゐるわけではない。方言では、主格は「ノ」によつて表示されるのが一般なのである。(九)

佐賀・「ノ」および「ガ」は、連体格にも立つ。

ドユ一ノ ウチニ ナツテ ナン久。土用のうちになつて
ねえ。

このような「ノ」の用法が一般であるが、「オドンガトコ」ワタシガオヤ」などのように、自称代名詞などに関しては、「ガ」のおこなわれることがある。ここにも、「ガ」に、謙遜の意識(の根柢)が認められる。(九)

長崎・準体助詞はオイガト、オレガトの言い方が広く使われている。(九)

長崎・(準)トカ・ノトカ・不定表示・タルガノトカ・モツテ来い(誰のか持つて来い) タルガノトカ替ツトル(誰かのと替つてる)(長方)

長崎・ノト……指示……オンドノトバトツタ(私が取つた)(長方)

長崎・ノトガ・トガ・代名詞・オンドノトガフトカ(私のが太い) ヤカマシカトガ来た(喧しいのが来た)。動作・来ッ

トガワカツトヤカマシカ(来るがればやかましい)、働クトガクスルタイ(働くのが楽だ)、比較・ナンカトガヨカ(長いのが方がよい)、アスコントガ上等(彼所のが)——(長方)

長崎・ノ・ノ一。語意を重ねて、アノノ、ソノノ(何のかの、ヨカノ、ワルカノ(好いの、悪いの)、尋ねる場合、トゲイクノ一(どこへ行くの?)、イツキタノ一(何時来たの?)、感嘆ヨカノ一(いいねえ)、アスカの意……ヘー ソーソー(へえ、そうですね) 呼びかけ……アノ ノ一(あのねえ)……各々アクセントを異にする。

主格がの意、鳥ノトマツトル(鳥がとまつてる) 家ノ見ユル(家が見える)。指示、足ノイタカ(足が痛い)、兵隊ノキヨル(兵隊が来つつある)(長方)

長崎・トモ ①ノ・モの意、人ノ来タトモ知ラズニ(人の来たのも——)、ウチノトモ、コマカ(私のも小さい) ②原因、コウナツタトモ元ハ口カラ(こうなつたのも——)、コウシテイカルツトモアノ人ノオカゲ(こうして行けるのも——)(長方)

長崎・トカノ……ダノの意・ナントカノ カントカノ(何だのかんだの) 米トカノ 酒トカノ(米だの酒だの)(長方)

長崎・ナ、「ノ」の意……色々ナモンバ出ス(色々のものを——)、目下の者(呼びかけて、今日イカントナ(今日行かない

のか(長方)

大分・準体助詞は、日田・玖珠・下毛奥地で、トイツ、中津市・宇佐・西国東ではノン、その他は一般にノを用いる。大野郡清川村六種に、オレント(おれのもの)が報告されているが、分布上、なお疑問が残る。(九)

大分・主部の機能も、修飾部のそれと本質的な差は認められない。が、ここでは、文表現の主題の表示にあずかるものを、とくに、主部としてとりあげることとする。

主格は、「ハラガ ヘッタ」のように、「ガ」によって表示されるのが一般である。老人間などでは、この「ガ」に由来すると思われる「ウ」の用いられることがあって、注目をひく。

ハラウ ヘッター。(腹がへった)

カジェウ フク。(風が吹く)

「ガ」に比較すると、下品である。

「は」の係によって存立するものは、その前承語音との融合の形態に特色がある。

キータ コター ネーケンド。(聞いたことはないけれど)

ソリヤー イワンゴタル。(それは言わないようだ)

デンキヤー キチョランジャツタ。(電気はきていなかった)

チャワンナ ネンジュー ウチワル ワー。(茶碗はいつも)

割るよ)

少年層では、「コン ホン ウチンノ ヨ」などのように、無助詞で主部を定立せしめることが多い。(九)

大分・(準)両豊に、イノ(ン)が、それ以外の地域にイト(ツ)が分布する。(九)

熊本・古代日本語では、いわゆる係助詞で強調したり、疑問反語を構成したりすることはあるが、単一な文構成「花散る」の如きでは、特に主語を示すための助詞は用いていない。複文の構成の場合に従属する句の中に主語述語の関係があれば、その主語を示すのに、「の」「が」を用いた。「鳥が鳴くあづま」のように。

現代語で、主語を示す助詞としては、「が」が考えられている。それは「は」「も」などが何もついでいない時には必ず「が」を要するので、主語が全く無助詞で示されることはなくなったのである。

熊本方言の文構成の一特色として、この東京語では「が」を必要とする所を、「の」を用いることがあるという点である。決して「が」を用いないのではない。「が」でなければならぬ所もあるのである。

1 雨ン降ッテ来タン

2 コドンノ泣キヨルソ

これは実は「ノ」「ガ」どっちでもよい。ニュアンスのちがひになるのである。どんなちがひかといえば、この「ノ」格の主語は、熊本方言の創始ではなくて、上代以来の従属句の主格の示し方の名残である。下に来る用語が連体形をとれば、「ノ」で結ばれた文は、体言格の句となった。それが、独立して文表現として完結する場合は、詩歌によくあつたので、たとえば有名な「静心なく花の散るらん」などがそうである。「花の散るらん」は連体形で結ばれていると見られ、一首全体が体言格の句となつて、「ことよ」というような余韻的な詠歎で表現が成就するのである。「子供ノ泣キヨル」は「ノ」で強く引きまとめられて、それが体言格の性質を帯びて「ゾ」の強調で表現を成就する。上代語の「が」は「の」と同じ類だが、はっきり領域を分担していておきかえられない場合が多かつた。熊本方言ではそれを反映していると見ることができらる。

問題を主格の示しかたに限って、方言でどうなっているかを見ると、「が」でなければならぬ領域がある。「ノ」でおきかえることの許せない表現を拾ってみると、

- 1、冬ヨリモ夏ガヨカ
- 2、こるが機関銃の弾丸ばい（森本忠・小説「こまたえず」）

3、泣くとかよかとすばい（荒木精之・小説「環境と血」）
1、2、3、の共通点は、断定的表現、「何がどうだ」の形式であること。

4、ぬしがかねてあんまり行儀が悪かけん（「環境と血」）

5、ワタシガ知ツトル。

6、家内ガ御伺イシマス。

4、5、6、の共通点は、卑称であること。これらは「ノ」でおきかえられない領域である。

徳川初期にローマで刊行されたコイヤードの日本語文典に、「助詞が主として身分の低い第一人称及び第二人称の後におかれる」と述べている。この「ガ」「ノ」を待遇法的に使ひわけたと見る右の記述にはかなり根拠がある。自称と第三人称の卑称に「ガ」を用いることは右に記した様にある限定をおけば熊本方言の現在の状態にも適用される。

7、私ノ知ツトル人

というような従属句の中では、必ずしも右の通則が生きないし、また、右以外が「ノ」の領域ではなくて、それは別の条件に支えられるらしい。ただ、

8、戻らした 兄者人の。（「こまたえず」）のような表現が、敬意を示すことになつてゐることは注意しなければならぬ。

右の様な文法現象をどう整理するかは、問題で、色々の傾向が同居して全体をなしているのだから完全に法則づけられない方が当然であろう。

第一、阿蘇郡の北部の人は「雨ン降りヨル」という表現は、熊本方言で自分からは使わないといっている。地方的にずれがある。

第二に人称に關しての表現性の差と、文を構成する機能の上の差が、「ガ」の「の」の上に交錯している。文を構成する機能の上では、主格を示す「ガ」は、熊本方言では判断の表現としての性質が主となる。「ノ」は詠歎の表現としての性格を帯びている。

9、コノ花ノ美シサノ

これは「ガ」でおきかえられない。

10、氣持ノワルカ

11、氣持ガワルカ

これは同様な文であるが、語気にはちがいがあられると思われ。

10は訴えである。11は判断の表現である。11はむしろ、

12、ソギヤンコツシタナラ氣持ガワルカジャナカカ。

というように、「愉快でない」という判断の表現である。これは上代以来のこの「ガ」表現の伝統の中に因を探られると思うが、ここにはふれない。(ク)

熊本・助詞ノは敬意が基本でなく、主格助詞としての性格が、老少を通じて強い。現象としては老年層に敬意用法としてガと區別する地点、個人も存するが、自覚意識をもつばあいはごくまれで、ノトガの敬意區別は八分通り失われたと見て良い状態である。「妙ナトコロニ火鉢ヤズ(奴)ガ(ト)ノ(は)用いない)オイテアルモンタケン」と「火鉢ノオイテアル」との対応關係が注意される。(九)

熊本・準体助詞はト・ツが老少ともに基本で旺盛な活動力を持ち、簡潔で有効な用法を保持している(ント・カツ・ノツのように複合するのが基本)。ノ・ノン(は)用いない。(九)

熊本・準体助詞「ト」「ノ」これは「わたしのはこれだ」紙に書いたのを出して読む「の」だが九州方言の中、大体肥後方言と薩隅方言とはその大部分が「の」の代りに「と」を用いる。用法は殆んど完全に対応するが、音韻上の対応ではなくて語彙上の問題であることは疑いを容れない。

熊本方言では豊後方言との接觸面になつてゐる阿蘇郡だけが両方の形がいりまじつてゐる。

即ち阿蘇郡には

コリヤオリガンソ(此れはおれのだよ)

今ノワツイトルドカシラン(今頃は着いとるだらうか)

時ノニ思イ出ス(時々思イ出す)

これらは化石的な用法で、接尾語といったがよいものになっている。その他の地域は「ト」だが、これは広い母音の下に付いたり、長母音の下に付いたりすると、「ツ」に変化する地域がある。これは熊本市を含んで中部以北及び以東といったら早わかりするかも知れない。つまり西南部方言を除いた地域では、この母韻変化のかなり広般な通則が成立している。熊本市方言で例をあげる。

A

- (1) コリヤ先生ノツ・バイ。(これは先生のだよ)
- (2) ワシガツワ アルト・ゲロカ。(わたしのはあるのだろうか)
- (3) グレント・デンカマイゴツガイルカ。(誰のでも樗事があるか)

B

- (4) ナンテイウトカワカラシ(何と言うのかわからない)
- (5) ナニモノニアーツ・ゲロカ(何も無いのだろうか)
- (6) 日モナシカテ。(日も長いの！)

さて、このA B二つの用法は、京阪方言における「の」の発達を見ても別個に考える必要があるようである。特にBの用法は特殊な発達をした文法形態である。

即ち、Aの形態は、上代日本語の中にも「の」の方の用例ならある。万葉時代の「夫の」と「志斐の」とか名の下のをつける呼び方もそうであり、平安時代になると「わがのと」とか「后腹のは」とか今と同じ用法の例は見える。

このAの用法ならば「人磨がなり」という「が」もその性格をおびてくるし、「志斐いは申せ」というと「い」もその性格をおびてくる。

ところがBの用法は上代には見あたらない。近世にも例は近代語法成立期でも用例は少くて頻度が特に小さい。多くは上代の物語文学と同じ用法で、近松あたりに下っても、多くは、

恋に死ぬるは一人もなし(長町女腹切)

といった形である。用言の連体形をうけて名詞句を成立させるには、上代日本語は何も助詞を用いなかった。近世でも京阪方言ではそこに「の」をつけて示した例はその形が成立しているが、頻度がきわめて小さくて、用例発見には努力がいる。狂言記の「よわいち」の中には数例あって「出たのがない」などある。近松でも少いので、「わざくわ酒といふのじや」「壬生大念仏」など形はちゃんと出来ているが、搜すのには骨が折れる。そこで九州方言の場合であるが、その探究が実に困難である。この語形が文献に出ている唯一と思われる例はコイヤードの日

本語文典(一六三二年ローマ刊)で、

属格を構成する前述の助辞の後には、時には助辞トが置かれることがある。Pedro no to de Gozaru 然し之は完全な言ひ方ではなく、理解を助けるために用ひられるのであるから、用ひない方がよい。

とのべている位である。この書の記述は大体日本語の正しい表現法を伝えようとしているにしても、この書刊行の頃は既に長崎が主な接触の舞台であったのだから、その理解する日本語はやはりある程度九州方言の投影を受けるのは避けがたかつたろうと思う。用いない方がよいといっているのはそのへんの事情を反映しているかも知れない。

そこで「の」についてもBの方の発達はずっと後れて、しかも用例が一般化していなかった点から考えて、A用法の方で九州方言に特有な「ト」の先例となるものがあるかと探すと代名詞に次の例が眼につく。

こ・ち・とも 会稽、その身の手柄(今宮心中)

はて、こ・ち・とが云ふてすむことならば(ル)

この「こちと」に「ら」をつけると「こちとら」となり、この形はかなり知られている。これを

なる程そちのが尤もじゃ(傾城仏の原)

姫がのは自力念仏(壬生大念仏)

と比較すると、相通ずる点があることは疑いもあるまいと思う。それでは

そなた、こなた、あなた、どなた

の種類の代名詞の語原的構成はいかがであろうか、母音交替を伴っていると思われるから、

その・と ↓ ソナタ

この・と ↓ コナタ

あの・と ↓ アナタ

どの・と ↓ ドナタ

と解することも可能であろう。

出る・所 ↓ テンド

為む・所 ↓ センド

当て・所 ↓ アテド

トがトコロの下略ではなくてトが却って語根であろう。そして新語を構成する力を有していた頃はこの語根が生活力を有していたので、的は「目・所」であり、「メド」もまた別の発生で「目・所」であったのであろうし、「足の踏みど」といい、跡も「足・所」であって解釈可能である。

私は曾て単体助詞が領格助詞「の」「が」に発生のモチーフが

認められるので、も一つ古い領格助詞と認められる「ツ」(國の神・しづ機・身づから等)に九州方言の源流を求めようとし、これを第一の仮説として跡づけを試みたが、これはこの準体助詞の發達が近世日本語成立期にあるので、結びつかない。これに語源的には同系であるか、別系であるか証明できないが、上文を承けてこれを代表し、下の述語格の語にかかる「と」が、このB用法の準備をしているらしい。この「と」は他の助詞とちがって句を代表する機能を有して、音の上からも、上の語に融合しないで、下の用語に一つになろうとする特殊な性格がある。

日ぐらしの鳴きつるなべに日はくれぬ
と思ふは山のかげにぞありける

(古今集)

この「と」はどちらにつくか。付属語としては上の句の末をなすが、また「思ふ」に冠さっている。平安朝の歌の字あまりの通則からすると「日はくれぬと」で第三句にすることは母音音節を含む句でないから格にはまらない。「と思ふは山の」は母音音節を含んでいるので「トモフハ」のように発声して通則に合する。

この「と」は更に、下に「いふ」という陳述を省略した含みをもつて、「とにこそありけれ」「とぞ」「となん」「とや」「とよ」の

ような形で文末を構成する用法も上代に發達している。殊に「とよ」は完全に文末助詞化して

誰とはつらし、村雨の露もまだひぬ榎の葉のとよなふ。(近松・三世相)

などの例になると、熊本方言の「タイ」という文末助詞の語原に擬したくなる。

それにまた前述の体言格の助詞「と」と、この文末助詞「タイ」との地理的な分布がほぼ完全に一致するのでこのB用語の發達には、この上の句を指示代表する「と」を考えなくなる。

貴く思召して僧都に成し給ひてけりとなむ。(打聞集)

平安末期の文章であるが、「なむ」の下に「いふ」を補つたらよい。だがまた

と「いふ」並になむある。

と解しても誤でない。さすれば、「と」は、上の文を句としてうけるが、時にはこれを体言化するともできたのである。

AB両用語を完全に結ぶことはできていないが、あまり古くもつてゆかずこの語法要素の語史をある程度明らかにする事ができたのではあるまいか、これは更に詳論の機会を得たい。(ク)熊本・連体格助詞は、ノだが、特殊にカを用いることもある。

ソガシコ クレクター。(それだけくれたよ)

ワシガ カシラムスコ。(わたしの長男)

アンタガエ。(あなたの家)(九)

宮崎・諸県は「ツ」を用い、オイガツチャの如く、つまる音として現われる。日向は「ト」または「ツ」のいずれか、しかし両方使う所も多い。(九)

鹿児島・オイガト・オイガツ(俺の)。(九)

奄美大島・「ヌ」格助詞、共通語の「ガ」、文語の「の」の外、行為者・関係・所在・時間・帰結・数量・目的原因、軽くあしらう場合等の表現に用いる共通語の「の」に当る。

ウシヌキユツカ(牛が来るか)。

ウヤヌユシグト。(親の教えごと)。

トーキョーヌツ(東京の人)。

キヌジュージ(昨日の十時)。

ヤーチヌミチ(家への道)。

ツヌアシウト。(人の足音)。

ニシヌミいじいラサ(見る程の値打はない)。(直訳は「見ての珍らしさ」である)。(コ)

沖縄・ヌ(「の」) 沖縄方言では、ワラビ、ヌ、チャー(童等の養)をワラピンチャーというのが普通である。このヌ(の)

を隔てて主語につく複数を示すことばと、直接付くものとは語によって決まっている。(但し例外あり)(コ)

〔を〕

九州総括・対格は、だいたい、肥筑地方で「バ」、豊日から薩隅地方にかけて、「オ」によって表示される。「オ」の立つ地方では、先行語末尾音が鼻音である場合、「ヌ」「ノ」などとなる、いわゆる連声の現象のみられるのが一般である(ホン「本」ヌヨム)。「ヌ」「ノ」では、「ヌ」のしめる領域が広いが、薩隅北部などでは、「ノ」が顕著である。この連声の現象は、老年層において、特にきわだっている。(九)

福岡・対格「を」相当の助詞は筑前・筑後でバ、豊前ではオであるが、日常語では助詞無表示のことも多い。オが撥音に続く場合、老年者では連声現象を起こしてノとなるが、大分県境の地点ではヌとなる。(九)

福岡・対格につく「をば」「に」が静的標準である事に対して「を」は動的、「に」が間接目的であるのに対して「を」は直接目的を示すが、筑前・筑後では特に直接目的を明瞭にしようとする、やはり「ヲバ」を用いる。然し、これは既に六十才

以上の年令層に見られる現象で、多くは軽く「バ」を用いる。

「バ」を用いることは本州東北地方にも存するが、鹿児島地方では却って標準的な「ヲ」を使用することは注目すべき現象といえる。(フチ)

佐賀・対格を示す「を」はバとなる。大浦多良地区で「をば」の形をとどめたンバを用いるのは珍しい。例、お茶を飲む√オチャンバノム。(九)

佐賀・目的格「を」はこのままも用いるが(上に撥音「ン」がくれば音便で「密柑ノ」普通は「をば」から出た「バ」が両筑と肥前そして彦岐に行われ(東北地方の「バ」は主格を受けることが多い)、「ユ」が両豊に圧倒的。(九〇)

佐賀・対象的は、「バ」によって表示されるのが、一般である。

コイバ クイライ。(これを下さい)

ホンバ ミラスツ。(本を見せる)(九)

佐賀・対象は、また、「オ」によっても表示される。が、それは、「バ」に比して、使用頻度が低い。

ペンキョーオ シェンクシエニ。(勉強をしないでくせに)

この「オ」は、前行語の末尾音と融合しても実現する。

ハラ(腹を) シゴト(仕事を) ハナシユ(話を)

なお、少年層などにあつては、次の例文のように、「を」格無表

示の表現も多い。

メシ キーウオツ。(御飯を食べている)(九)

佐賀・長崎・対格を示す「を」は「バ」になる。大浦多良地方に「ンバ」(お茶ンバノム)があるのは珍らしい。(一〇)

長崎・対格を示す助詞「を」にあたるものは、一般にバが使われる。対馬だけではオを用い、撥音のつきではノと発音する(上対馬・上県・豊玉・巖原・豆酸)。(九)

大分・「を」格表示の修飾部は、「オ」が、前承の語音と融合の形をとるのが一般である。

ウモ(馬を放す)

タバク(たばこを吸う)

コリユ(これをあげよう)

メシユ(飯を食べよう)

ミズ(水を飲む)

ジーサンヌ ヨンジ クイ。(じいさんと呼んで来い)

少年層では、「ゴハン タベ ヨ」などのように、「を」格を、形に顯示しないことが多い。(九)

大分・対格は、Xオで表わす。名詞の語末音と融合して、花オはハノ、酒オはサキユのように長音語形をなすがふつうである。ただし、ヒキ音に終わる語、一拍の語は、そのままX

オ。ハネ音に終わる語には、連声して、たとえば本ヌ説ムのよ
うに言う。東国東では、花オはハナ一、酒オはサキヨ一、本オ
はホンノとなる（後二者は県南海岸部でも）。（九）

熊本・肥・筑（西部）に、一バが分布。他域はだいたい一オ
系。薩摩に一ノ、大隅・日向南に一ヌなど、連声現象がある。

この両現象は、豊後、対馬内にもみられる。（九）

熊本・目的格を示すのに、熊本方言が、「ば」を用いることは、
よく話題にも上る特徴形の一つである。「ば」は成立の上からは、
むしろ「をば」の「を」が脱落したのである。省略でなくて上
に来る語の末尾の母音と「を」の母音と二つ続かために、自然
に発音が怠られたものである。

1、人んこつば、そぎゃんひいきの何のいふやうなもんに、
ろくなもんな居りやせん（環境と血）

（人の事をば）である。この目的語を示すのに、熊本方言で
は、「ば」を用いるか、無助詞かであるが、無助詞で事足りるの
は、「水飲ム」「飲食フ」式の単一な構成の場合で、1、の例だと、
「ば」はなくては文がまとまらない。「人んこつイウ」ならば、
「バ」の有無はどちらでもよいと思われる。

この「ば」は脱落した「を」の機能を完全にになうことにな
っているので、述語に続く代りに、接続助詞ないし終助詞的用

法も可能である。

2、何ニモ知ラントバ、邪気マワシテ、癪ニサワル。

この表現であれば、（何も知らないのに）である。

3、なしだらうか、わが銭出アての人だつば（肥後狂句）

（何故だらう、自分の銭で飲んだ酒に、税金出すとは理解で
きな）という意味だらうか。文末は「のんだのに」の意であ
ることはもちろんである。

「水が飲みたい」という程度の短かい文では、無助詞で、

4、水飲ミタカ、水飲モゴタル、水飲モ も勢力がある。し

かし、「水が飲みたいかビールが飲みたいか」と、択一的な表現
をすれば、これは県下どこでも「水が」「ビールが」とが助詞が
現れる。

これは、ガ表現が判断表現の形式だからである。「水バ」の形
ももちろん普通の表現である。大分県に入れば、この「バ」表
現はなくなる。熊本県で、阿蘇郡北部は「バ」表現よりも「ヲ」
表現の方が目立って来る。

5、銭ノ持ツチョルカ

6、郵便ノ出エチクル

この例を出したのは連音によるヲ↓ノ変化をついでに紹介
して、他の地域との違いを印象づけたいと試みたにすぎない。

球磨郡に行くと、「ヲバ」が脱落なしに現れて、そのために熊本の人から笑われた事があると語った人があった。ともかく「ば」は肥筑方言の特徴形である。(東北方言にもこれがあるが、こゝでいう意味は、九州方言における関係である)(ク)

熊本・共通語の格助詞オに対応するのは格助詞バであるが、老人層では、ヨバの形で用いられることがある。

サケヨバ ノモゴアル。(酒を飲みたい)

ハヨー キャーモンバ スマセテ モドランバ。(早く買物をすませてもどらなければ)

コノミチバ マツスゲ イクター。(この道をまっすぐ行く)
(九)

宮崎・対格「を」は、県内一般に「オ」を使用、ただ、はねる音で終わる語に付く場合、所により「ヌ」となることもある。「バ」は、西臼杵郡一帯と東臼杵郡の諸塚村・北方村などで使われている。(九)

鹿児島・はねる音には、本ヌ(県南)本ノ(県北)。種子は本ノ、屋久は一部で本ノ。(i)(o)で終わる後に「ヲ」がつかと融合するのが特徴。「柿を」は [kaki, kaju, kaku] など色々の形で分布する。大隅の伊坐敷のハル(鉢を)ドンパル(どんぷりを)もよく理解される。対格の「バ」は飯(全)

長島(一部)、上屋久(一部)で聞かれる。(九)

鹿児島・次の各見出しの「格」に立つ修飾部の、ものと形とは、以下のとおりである。

(に) iニ、iイ、i(ニ)△例 ヤメ|山に、ソケ|底に)▽、
iケ、iケ△例 コケ|買いに)▽、iガイ、iカイ△例 ムシ
カイ|ササエダ。(虫にさされた)▽

(へ) iサメ、iサエ、iヤー△例 ミッセー|右へ)▽(方
向)、△ノ|ササメ(後に)▽ (時間)

(を) iオ、iニユ△例 シンブン|ニユ(新聞を)▽、i(オ)
△例 ハユ|鉢を)、クヂユ|靴を)▽、i(オ)バ

(と) iト、iチユ△例 ケチユ ユダ。(来いと言った)▽
(から) iガイ、iカイ

(より) iヨツカイ、iヨツカ
(で) iデ、iガイ、iカイ△例 ワダシカイ|渡船で)▽ (九)

鹿児島・主部には、格に立つものと係に立つものがある。係に立つもの「iは、iも」には、修飾の場合と同じ形のものがある。格に立つものとしては

(が) iカ、iガ
(の) iノ、iン

の二体・四形があり、いずれも一文の主語になりうる。「カ・ガ」

は、通常の主部形成に関与する。一方、「ノ・ン」による主部形成には、敬・卑効果に伴う。

カンナレド^ンノ | ナラツ | ド。(雷様がお鳴りだぞ)

クチヨドンノ | キヤツタロ |。(区長さんがいらっしやうたろう)

などのように、尊敬すべき対象を主体として述部の尊敬法と相呼応する、尊敬態の主部形成に関与し、一方ではまた、

フユモンノ | ナユ | ヒツカアス | カ。(不精者が何を言いやがるか)

のように、卑罵態の主部形成にもあずかる。△雨ノ降ル▽などは、決して言わないのである。(九)

(三)

福岡・目的を示す「に」、「見に行く」「取りに行く」といった場合に現われる「ゲー・ゲ」は重母音(三)と連用のあるものと見られるが注目すべき助詞である。(フチ)

福岡・方向を示す「に・へ」、用法の多い「に」は「東の方に行く」の如く運動の方向を示す語の下の場合では「へ」(語源「辺」と同じ語法に落ち合うが細かに見ればやはり「に」は落ちつく位

置を示す味があり「へ」は向って行動する方向を示す味がある。福岡県地域では、この両者はもはや判別し得ないまでに混用している。これの一種に「様」の訛形からきたと見られる「サニ・サネ」「サイ」が県地域内では頻りに使われる。体言に続いて方向を示すことは、「に・へ」と同じであるが、これは「ヲバ」の場合と同じく、強勢の味が含まれている。(フチ)

福岡その他・与格「に」はこの形と共に「イ」となるのが普通である「人イヤル」、近世初頭から説書に散見する「京へ筑紫に坂東サ」の俚諺にもある。そして周围的に東北地方と呼応する「さま」(二)有様「逆様」横しま▽邪」は元来形状様子を意味した名詞であって、固有名詞の下へ来て方向宛先を意味することとなり、三転して人名へ統ける敬称となったのであるが、九州では方向を示す時は「の様に」から引摺られて「の如く」なる用法がむかし生じて、これは今日も稀に「大分^{だいぶん}ゴツ行ク」という、北九州では「サン」(豊後に多い)「サイ」(筑前)、「サネ」(筑後)、「サン」(筑後・両肥)形が一番広く分布しており「シメ」「シネ」も散在するが、さらに同一人が強調度に応じて数種使いわけられる場合もある。また敬称としては「彦シヤン」の様に詠るのが筑紫風である。(九〇)

福岡・方向・方位 ニであるが、助詞無表示のことも多い。

強勢指示は筑後でサン・筑前でサイ、豊前ではサエである。(九)

佐賀・動作の目的内容を示す助詞ギヤは、動詞連用形に接続して全果的に用いられる。例、買いに行く√キヤギヤイク。(九)

佐賀・(北)・方向・場所は、「ニ」によっても表示されることがある。この傾向は、若い層に見られる。

ガッコニ イカンテ ヨカ ジャー。(学校へ行かないでいいよ)

この「ニ」は、前行語の末尾音と融合して、次下のようにも実現する。

ハカチャー(博多へ) クマモテ(熊本へ) マツエー(松江へ) ナガサキ(長崎へ) カラチ(唐津へ)

全般に、この「ニ」による格表示は、劣勢である。(九)

佐賀・(北)・ギヤ、目的は「ギヤ」によって表示される。米をオサメギヤ イキウォッタ。(米を収めに行つて)

ウイギヤ キンサツギニヤ。(売りにおいでになれば)少年層などでは、これを「ヤー」ともいう。

アスピヤ イコーカ ナーイ。(遊びに行こうかねえ)

佐賀・長崎・時処格の「ニ」は先行語に影響されているうちに形をかえる。

先行語尾がNや長母音の場合や、先行語が一拍語の場合は、「ニ」を用いるが、その他の場合は次のようになる。

佐賀に [saga:] 東に [tōka:] 外に [soto:] 別に [bet:] 机に [tsukue:]

この場合、容易に [ori:] 団体に [tōkutar:] 兵隊に [heitar:] のように、「ニ」が「リ」となる現象も見られる。(コ)

長崎・行為の目標を示す助詞「ために」にあたる言い方は、ギヤが広く使われるが、対馬は壱岐とともにゲ・ゲー、五島はガを使う。(九)

長崎・長崎方言として慣用される助詞は語彙が甚だ区々で、その用法もまた頗る乱雑を極めて、今これを標準語の助詞に対比しつゝ一々その用例について点検して見よう。

カラ
ニの意
自転車カラシカレタ。(自転車に壊れた)

先生カラオゴラレタ。(先生に叱られた)

デの意
物体 車カラ米タ。(車で来た)

場所 門司カラ船ニノル。(門司で船に乗る)

原因 ソノ事カラモメタ。(その事で——)

ヨリの意

場所 ソコンサツカラキタ。(その先から——より)

ココントコロカラネムル。(ここから——より)

(長方)

大分・動作・行為の目標を示すのに、動詞連用形十ヶ一(ケ)

の形式が県の北半(東西国東・速見・宇佐・下毛・日田・玖珠)

に行なわれる。例、クツ コイゲ イキヨル。(靴を買いに行く

ところだ) 県の南半は、単に、靴買イニ行キヨル と言う。(九)

大分・(長)・格助詞によってしめくられる修飾部をとりあ

げる。

ーニ(イ)

方向は、若い層中心には、「ニ」によって表示される。が、こ

の「ニ」が弱まり、「ヒタイ イツチョツタ」(下の家へ行って

いた)のように、「イ」と実現する場もある。

さて、この「ニ(イ)」は、普通には、前承の語音と、融合の

形をとって実現する。

タケテー イク。(竹田へ行く)

ドキー イタン。(どこへ行ったの)

ハタキー イタ。(出へ行った)

ウチー クイー。(うちへ来い)

ベッビー イク。(別府へ行く)

ただ、「ガツコーニ イク」などのように、長音、それに撥音

などに接する場合には、融合しないで、原形のままおこなわれ

るのが一般である。

少年層などでは、

ドコ イク ン。(どこへ行くの)

カーチャンノ タイショ イク ニー。(お母さんの里へ行

くのよ)

のように、格が形に顕示されない場合も多い。(九)

熊本・熊本県や佐賀・長崎などで「見に行く」を「見ギヤ行く」

「買いに行く」を「買いギヤ行く」という。大分・福岡では「見

ゲ行く」という。「見ギヤ」「見ゲ」となるのは、古く「見ガイ

であった証拠。現に、近松門左衛門の「博多小女郎浪枕」に「源

訪へ随り見ガイ行く、行き違ひに」とある。見ガイの「ガイ

は、古語の「ガリ」のなまりであろう。平安時代「人のガリ」

というのは、ある人の所にの意。いま博多で、「おまえんガイ

(君の所)、「あたきんガイ」(私の所)という。見に行くのは、

見る所に行くことだから、見ガイニ行くといい、それが、見ガ

イとなったのであろう。(ヒゴ)

熊本・(深)・共通語における目的準体言を受けるニに対応する格助詞にギヤがあるが、ゲの形をとることもまれにある。

アソビギヤ イク。(遊びに行く)

ウリゲー イククライノコトジャンナー。(売りに行くぐらいのことですよ)(九)

熊本・「買いぎや行く」これは鹿児島では「ゲ」となっている。

「買いに行く」に当る語法である。ある論者は「ニ」「ギ」の音韻上の相通だと説いているが、これはそうかたづける前に、ギ

ヤと同系の語を比較してその共通の原形を再構する必要がある。

長崎県の各地には、この助詞に「ゲー」を用いている所もある。

すると、熊本で「ギヤ」であり鹿児島で「ケー」になり、「ガイ

崎県では「ガー」になる共通の原形は「ガイ」であり、「ガイ

は二つの助詞「ガ・ニ」であろうと想像される。「買ひ・が・に」

となる。「が」はそのために、それほどにの意に上代の語法に

現われている。但しそれは連体形プラスの形だが、それは連体

形が体言格になって、それに体言格の記号として「ガ」が用い

られている。所が上代にも近世にも、連用形名詞法がかなり勢

力を有している。「買ひ・に」も名詞法プラス「に」である。「カ

イギヤ」も「カイガ・ニ」で名詞法プラス「に」である。音

韻相通説は適用されない。(く)

熊本その他・

一週ニ、正月シギヤア、戻ル舟(肥後狂句、「一週ニ正月シ

ニ、戻ル舟)

アケバ、ジーキ、アソビギヤアイク(天草、「飽ケバスケ遊

ビ、行ク)

ウンドシガテラ、マチミギヤアイコイ(天草、「運動ヲシガ

テラ町ヲ見ニ行コウ)

ツンノーテ、見ケイコウバイ、芝居サへ(柳川方言河沙

「連レグッテ見ニ行コウヨ芝居ニ)

花ヲ見ケ、オルスナローハ、インマクフ(柳川方言河沙

「花ヲ見ニ……」「オルスナローハ」不明、「イラッシャルナ

ラバ」の意か)

右の用例に注意すべきは、此の「ギヤア」「ゲー」「ケー」は「ニ」

助詞のすべてに用いられるものではなく、動詞の連用形に接し

て目的を表わす場合にのみ用いられることである。(九方)

熊本その他・行為の目標「に・ために」、両肥に、イギヤ、

ギヤ。両筑に、イゲー、イゲ、薩隅・日向に、イケ、が分布す

る。いずれも同系。北九州から豊日へ、イニ、がおこなわれる。

(九)

鹿兒島・宮崎南部・「イ」場所・方向・動作の目的・受身・使役表現における動作の主体などをあらわす。例、ガッコイイツ（学校に行く）この語は上の語と融合することが多い。この現象は格助詞「を」、ン「の」、副助詞「は」についても見られるので、次に一括して表示する。

	イ	オ	ン	ワ
フネ(船)	フネイ	フネオ	フネン	フネワ
カッ(柿)	カキ	カク	カツノ	カキヤ
スツ(杉)	スギ	スグ	スツノ	スギヤ
ナツ(夏)	ナチ	ナツ	ナツノ	ナチャ
オン(鬼)	オンニ	オンヌ	オンノ	オンナ

鹿兒島・宮崎南部・「ケ」共通語の「に」に相当するが、これには動詞の連用形に続いて往來の目的を示す用法しか無い。例、アソクケクツ。(遊びに来る)(コ)

鹿兒島・目標には本土でケ。種子でカー、屋久でケ・キ・ガ(濁変化)など。飯はキヤー・ケー・カー。(九)

〔ハ〕

九州總括・方向・方位は、「さま」に発する「サン」「サイ」「サネ」類(学校サンイク)と、本来は、帰着点を示すはずの「ニ」とよって示される。前者は、日向北部地方に、後者は薩隅地方などにみられにくい。が、その他の地域では、ほぼ両者併存の状況を示している。両者には、もとより、表現上の微妙な差異は認められる。例えば、大分南部で、「サネ」は、老人間に、方向——というより、経由地を示す用法がある(役場サネ行ツチ学校ニ行ク)。「サネ」のこのような用法も、一般にはうすれて、「ニ」と同様、一般的な方向、方位を示す用法が普通のようなである。佐賀北部などのように、「サン」類が古態である意識されている地方もある。北九州では、この「サイ」類が、強調に用いられるとも報告されている。「ニ」に比して、下品とされる地方も多い。このように、両者は、様々なかかわりあいを示しているが、総じて、少年層などを中心に、「ニ」の勢力の、増大しつつあるのが現状である。なお、豊後には、「ドウリ」「ドリ」という、経由地のみを示す事象も、存立している。(九)

九州總括・方向・方位「ハ」

「サン」が肥・筑(西部)

「サイ」が筑前

「サネ」が豊後内

「セー」が薩隅内に分布する

豊日、対馬、壱岐に、「ニ(ン)」、薩摩に「イ」もある。

なお豊後には「ドリ・ズリ」があり、分布相はかなり複雑である。(九)

佐賀・方向・方位を示す助詞には「ニ」と「サン」がある。方向の「ニ」は長音をうける時はそのままであるが、その他の場合は子音 *n* を脱落し、更に音変化を生じていろいろと変わる。例、東京に「トキーニ、佐賀に「サギヤ」、唐津に「カラチ」、武雄に「タケウエ」など。

「サン」は「サニヤ」・「サミヤ」などともなる。少年層に限らず若い人たちは「サイ」ということが多い。(九)

佐賀・(北)・方向は、普通、「サン」によって表示される。

ムコーサン イキンシヤイ(むこうへ行きなさい)。

カッコサン イコーイ(学校へ行こうよ)。

これが、「サニ」「サニヤ」のように実現することもある。

少年層などでも、「サン」の使用頻度は高い。「ニ」も用いるが、これには、いくらか改まった感じ(共通語意識)が伴うようである。(九)

対馬・サネエ(へ)、「何処サネエ行くのか」(ツ)

長崎・方向・方位を示す「へ」は、「ニ」と「サン」の言い方が多い。

「サン」に似た言い方としては「サネ(上対馬)」「サメ(上県)」「サネー(豆酸)」「サニヤ(松浦)」「シヤン(大瀬戸)」「飯盛・神代・小値賀・上五島」がある。(九)

大分・方向や方位を表わす格助詞としては、「エ(へ)」を用いず、掃着点を示す「ニ」で兼ねる。「X」には弱まって「Xン」・「Xイ」となるが、さらに「イ」が名詞の語末音と融合して、長音語形をつくる。「大分に」は「オイラー」、「別府に」は「ベッブイー」のごとくである。ただし、「ハネ音」・「ヒキ音」で終わる語、および一拍の語には、そのままこの形で結合する。雲仙ニ、東京ニのごとし。

特に、掃着点を含まず方向方位を示すには、「Xサメ(日田で)」、「Xサネ」・「Xドリ」・「Xツリ」・「Xンゴツ」などの形式を用いる。このうち、「Xサネ」は、直入などで、やや漠然たる方角、方面を示す。したがって、経由点を示すことがある。そこで、竹田サネ大分イ出タ(竹田経由で大分に出た)とも言えるのである。(九)

大分・(長)・方向は、「サネ」によっても表示される。

フミチャン カサン ホーサネ イツタワー(ふみちゃん
は上の方へ行ったよ)。

ソッチサネ ズリヤー エー(そちらへ出ればいい)。

さて、上の例文のように、「サネ」は方向を指し示しはするが、限定性がうすい。この故か、老人の間などでは、

ヤクバサネ イチ ガツコーニ イク(役場へ行って学校へ行く)。

のように、最終目的地でなく、経由地のみをめざす用法を生んでもいて注目される。「クジューサネ イヌル」と言えば、久住経由で自宅へ帰ることになるという。(九)

大分・(長)・方向は「ドウリ」(ドリ)によっても表示される。タケタドウリ イチ オーイテー イタ(竹田を通って大分へ行つた)。

この「ドウリ」は、経由地をめざすのが、本来の用法である。「サネ」に比較すると、やや品位が下がる。主として老人におこなわれる。(九)

大分・宮崎北部・土師には「へ」に当る格助詞がない。方向格もニで兼ねる。特に方向を示そうとするときには、インゴツ、またはイツリの形式を用いる。(大分・ゴツ、出ヨル)

玖珠地方では、サメ・サネ・シネなどを用いる。宮崎にも、シ・シネ・サネを用いる所がある。妻もそうである。(コ) 大分・ココドリ、(ココン・ゴツとも)この方へ(玖)(速)

(分)(北)、ドリは通りの変か。

ドリ、……の方へ、……へ、あっちドリ(あっちへ)、「通り」の約。(分)(野)(北)(市)(別)(宇)(玖)

サネ、……の方へ、(全)(佐賀サニ・熊本サン)▼物五 ハ
オ「肥前にてサナへと云ふ」(ロドリヶスーサナ)

シネ、(サネに同じ)……の方へ(玖)(竜岐同、熊本サン)
例、アンゲシネ行く(彼方の方へ行く)(大方)

熊本・(格助詞ニ・へと上接語との融合化、ハの連声)目的格にヲを用いず専らバを用い、ニ・へを使いわけずサンを用いる(山サン行ク)ことなども問題であろうが、ニ・へを使いわけずサンを用いる(山サン行ク)ことなども問題であろうが、ニ・へを「馬にのる・山に行く・確かに・学校に・妙なことに・何処に」のごとく融合化音声にし、またオ父チャンナのごとく主格ハを連声にしてしまう(大分流の「本ノ読ム」はない)ことは、格助詞を明確に外に出して分析的に表現して行こうとする共通語の傾向と相反するだけに、教育上注意すべき点である。(コ)(ヒ)

熊本・方向・方位はサン(サメ・サミヤとも)と、エ・ニ・イである。後音はKunamoto(熊本へ)・ni(西に)・Jamie(山に)のように前接語の後母音に融合するばあいが多い。

対格はバカ、無記号。経由・手段のカラは全県に優勢である。動作目標のーギヤ・ケも、全県に老少を通じて優勢である。(九)

熊本・(深)・方向・経由を示す格助詞にはサンが用いられる。

ココサン ケー(ここへ来い)。

ドコサンテン イタチクル(どこへでも行ってくる)。(九)

熊本・(深)・方向を示す格助詞として、イが用いられるが、音声変容をこうむって、イーとなったり、エー・ヤーとなったりする。

ドケー(ドコイ)

コッチー(コッチイ)

オレギヤー(オレガイ)

(九)

熊本・ニ・サン・ギヤ

1、ガツケーイテクル

2、クワイシャーツメトリマス

3、郵便出シイ行キマン

4、葉書買イギヤ行テケー

5、熊本サン送ツトイテヤル(サミヤ・サネ・サニヤ・シヤ

ナ・シヤミヤ・シヤン)

東京語の「に」に当る方言文法である。123は、はつきり発音させたら「に」が出てくるだろう。4は用法3と同じだが、特殊な成立を有する。「買いに行く」を「買イギヤ行く」とか「買いが行く」とかいう形は、きばつなものである。近世京阪方言そのままの影響下に成立したのではなくて、もっと早く地方

的に進化をとげた方言と考えられる。5については、語源は阪東さと共に、「さまに」または「さまへ」である。室町時代に既に阪東さといふことがいわれているから、その頃には、この方向を示す助詞は地方的変化を上げていたのであるから、九州方言の場合も同様に変えるべきである。

「さま」は本来は形式体言である。それが語根となって方向の助詞に展開した。それは、も一つ早く形式体言「へ」が、上代日本語の方向の助詞として進化したと同じ関係である。

これと、全く同じことが、形式体言「やう」(椽)を語根として、6、江戸ノヨウニ旅ヲシタ

という表現が、熊本の老人層の言葉にある。また、「如し」の語根である「ゴト」を採用して、

7、熊本ンゴテ行タ

8、江戸ンゴト行キヨツタ

の形が、同じく老人層にだけわずかに残っていたのを、筆者らは少年時代に耳にしている。

近松の博多小女郎波枕の毛刺九右衛門の長崎訛は、元禄期の肥筑方言の描写として、熊本方言の史的考察にも参考すべきものであるが、「上方さなへ突走る」とか「筑前さなへ此船廻し」とか、この助詞の特徴がよく出ている。

(元禄期) サミヤ

(現代) サミヤ

サマへ

サメ

サマへ

サナへ

サネーサン

サニヤ

(ク)

宮崎・方向・方位「へ」に関しては、県内「ニ」「ン」に転ずることもあるが一般的であるが、また日向では所により「サネ」を用い、諸県では「セー」も多い。(九)

鹿児島・方向・方位「へ」。セー・サイ・サエ・サメ・サネ・

サン。種子サマー・甌サミヤ・サメー・サマなど。(九)

奄美大島・「チ」

①共通語の方向の「へ」に当る。

ヤーチ イコ(家へ行く)。

②後に来る述語の内容を冒頭に出して説明する場合の「って」

「と」に当る。

ワンバ ヌシドチイバイ(私を盗人と言えは言え)。

③主格につける「というのは」に当る。

ハブチウトラルサンヤ(ハブツて恐いんだね)。

④共通語の「……などと」「……なんて」に対しては、「チ

ンキヤ」というが、「チン」は、「……と」、「キヤ」は「など」であるから、語の並び方が、共通語と方言と逆になっている。

〔注〕1 動作の向けられる相手が人であるときは、方向の助

詞「チ」は、「メエー」(前)を介してつく。

ワメエーチチンニ(僕の方へ来てごらん)。

2 「こそあと」の前の方向の助詞は・クラマーチ(こ

ちらへ)・ウマーチ(そちらへ)・アマチ(あちら

へ)・ターチ(どちらへ)のように、「こそあと」の

語尾が長母音になる。但し、クラマーチ・アマチ

の代りに、「カン」「アガン」を用いるのが一般的で

ある。(コ)

佐賀・長崎・指示格の「と」が「テ」になる。

ナンテ ユータヤー(何と言ったか)。

このテをチとする地域が両県下に点在し、東松浦地区には両

者をあわせたようなテチを用いることもある。(コ)

熊本・「て」「な」

熊本方言の格助詞的な一類の中で、後世の音韻変化だけでその

形の説明つかないものが、ここにあげる「て」「な」等である。

「買イギヤ行く」の「ギヤ」をもある学者は、カ行音とナ行

音の相通で説明しているが、それはゆきすぎであることを、「熊

本方言の古さ」の章で説いた。しかしこの「て」「な」はどうだろうか。

1、名ワ、太郎テイイマス

2、私ワ、ソソウセ、テテワイワンゲツク

3、スケセケケーテチバイ

3、は「といって」の転としても、「テチ」で説明がつく。下の音に引かれて母音が変化したと考えるのである。1、2、の場合はそのでない、これは時間の大小を考慮に入れねば、いずれ3、のような理由で成立した「テ」の形が、この助詞全部に類推されたものにちがいない。東京語の中にも、「すぐ来いって」の形はある。私がこ、で注意したいのは、この上の語句を承けて下の動詞にかゝる助詞の「と」が、皆一応「テ」で平均されていたということは古い時代の変化を残しているのではないかといいことである。「ソレテヨカテオモウ」「マチガイテ見タ」、例外なしである。

古くはないかと思う一つの理由は、万葉集に現れた東国方言では、この形が「て」で現れている。

父母が頭かき撫で幸くあれていひし言葉ぞ忘れかねつる

(防人歌)

次に「な」について、

1、何ニモ知ラデナ遊ユビヨル

2、学校ニモ行カジナドウスルカ

この類で前にふれた通り、これも「に」にあたる助詞の部分が「ナ」で現れている。万葉の東国方言が、これと同じ語法を「ナナ」で表わしている事と恐らく関係づけられる現象である

(ク)

熊本・「と」「ご」と「文法私見

時枝博士の文法では、「私のは」「見たのが」の「の」は、形式体言に属して助詞からはぶかれている。こ、では一般に従って単体助詞として肥筑方言の特徴形「と」の文法をとりあげて見る。単体助詞としての「と」は、「熊本方言の古さ」の章で、その歴史性を説いたので、こ、では文法的機能だけ問題にすることにする。更に熊本方言に存在する「言ヒゴツアドウカ」の、「ゴト」について、その方言文法上の役目を説いてみたい。こ、にいう「ゴト」は、一単語と見るか、接尾語と見るか、一単語とするならば形式体言と見るか、単体助詞と見るか、いろいろ問題であると思うが、細かな論議をしているとまはないから、文法的機能、表現性を見てゆく中に、おのづから帰結を見出したい。

1、コリヤダリガツカ

2、コリヤダリガトカ

3、コリヤダリガトカ

2、は県の西南部、天草、葦北、球磨各郡での形である。3、は阿蘇で混用する形で、豊後系方言要素である。1、2、は単に音相の差で1、の形が現れる西南方言以外では、上に広い母音が来ると次に来る音節の母音が(イ)や(ウ)に転ずる場合が非常に多いので、その一つの例である。

これを東京語の「の」の用法に比較すると、「誰のか」と、体言に直接に接するに對して、体言に「ガ」がついてそれを「ノ」「ト」でうけている。体言に直接つくことがないという特質をもっている。

4、ワガガシタコツバ、ヒトニカラワセテ；(自分がしたことを、他人に負わせて)

「ワガ」に限って、こんな用法もある。これは「ワレ」と同じで、現在の語としては、それを一つの代名詞とみてもよいのである。

5、イクラガツ買一テ来マスカ。

6、イクラガタデンヨカ。

5、6、の「ガツ」「ガタ」は同語である。「がとこ」「がもの」など他の方言で見出されるとの等価であることがわかる。大分

県の方言には、「五十円がん」というのがあるが、これは阿蘇郡の北部でも耳にしたことはない。

7、コッチノツガヨカ。

8、コッチントガヨカ。

これは同じ熊本市方言について比較したのだが、7、8、は意味上何の変りもない。ただ上の音との調和の要求が「ト」となり「ツ」となるのである。

9、こん鯛が大體配給物ぢやたかつだろ。う。(肥後にわか)

10、魚ば持つて来るちうが間違うととだもん。(R)

用言の下についた例。この場合は、上の句を体言格として統一する機能をもつことになる。「花ノ散ルトバ」ならば、「花ノ散ル」という文が、従属句になるのであるが、それが「(を)バ」にうけられて目的語になる体言格として用いられることを、「ト」で示すのである。

11、休ミワ今日マテトバ、(今日までなのを)忘レトツタ。

(児童語)

これは方言としては破格である。しかし10、について述べた体言格を示す語法としては合っているので、この誤用も生じたのである、この種の誤用が新しい文形式を産み出すこともあるのである。「今日ワ日曜トバ」というのも同様。用言をうけるも

ので、直接活用語の下に来るのが正格であるのを、無視して新しく文を構成したのである。

次に「ゴト」の特殊な文法を観察することにするが、これは多少の子偏的研究が必要である。こゝにあげる「ゴト」は、動詞の連用形について「こと」(事)である。現代の標準的な物いでも、「見事」「仕事」のように熟語には残っているし、「すね者」「あり態」のように連用形から体言に連なるのは例に乏しくはない。これは熟語を作る語構成の一通則となっていたのである。

しかるに室町時代の口語に、これが、熟語とは見られない用例が少からず見出される。

(イ) 秦ノ民トナリゴトハイヤチャ (蒙求抄六)

これは今ならば、「秦の民となる事は」とおかれるものである。「ゴト」は、「秦ノ民トナリ」という句全体を承けて、体言格の句となしている。その点、現代語の「の」と全く同じ機能を有している。

(ロ) 人カラヨイ事ヲシタトシレゴトハイヤ(全、八) (人から善い事をしたと知られるのはいや)である。

(ハ) 是ホドノマコトナル将ヲセメ教シゴトハ惜イ(全、八)

この「ゴト」でまとめられた句を、助詞「ハ」で受けた文例

は、「イヤチャ」「惜シイ」「無念ナ」と否定的な判断の場合ばかりで、その数がきわめて多い。文形式が固定しようとする傾向が既に見えている。

(ニ) 実録ハ、其ノ人ノ上ニアリゴトヲカクモノチャ(全、八)
(イ) 家ヲサメゴトガナラヌ(全、十一)

数は少いが(ニ)のように否定的判断でないものもある。この場合も、「其の人の上にあり」を「こと」でまとめていることは、「其の人の上」としていいことで明瞭である。

そこで、熊本方言で、この「こと」が、文表現にどんな役割をしているかを次に説こう。

1、泣キゴツカイルカ。

2、イラン世話ノシゴツタイ。

1、2、共に否定表現で、「泣くことはいらない」「世話をすることはいらない」という意味。1、は反語になっている。2、は「世話をする」という意味全体が、「ゴツ」で句にまとめられている。(ゴトとしてもよい)

3、イイゴツカフルートル。(振るってる)

4、ソノイイゴツチュークナラ、アータ。

こゝではや、固定して「イイゴト」は熟語化している。3、は「言うことがふるってる」、4、は「その言うことの甚だしき

といったら、あなた、御話にはなりませんよ」と、その表現性がすこぶる豊か。この「ゴト」「ゴツ」が、ひろく動詞と自由に接続するさまは、

「見ゴツカイルカ」「心配シゴツアイルン」「行キゴツアイルン」「イランカマテシゴツ」「笑イゴツカイルカ」

もちろん多少石化して古い表現となっているから次第に慣用句に限られる傾向はある。やがてこの文形式は一二の慣用句だけ残す状態になるであろう。若い世代の口にはあまり上らない。野性的で強い表現であるから、なほ教養ある子女は口にするを憚るであろう。「老人がよくそう言いますよ」これが若い人々の文形式に対する反応である。(ク)

(で) (經由・起点・手段・原因)

九州総括・手段・方法は、西部一帯では、「カラ」「カル」「カリ」類によって表示される(船カラ行ク)が、少年層などを中心に、しだいに「デ」が勢力を得つつある。

行為の目標は、東部の一部を除き、多くは、「ギヤー」「ゲー」「ガ」「ケ」などによって示される。例えば「ウイギヤー行ク」(売りに行く)。上記諸事象は、すべて類縁のものとするところが

できよう。「ギヤー」は肥前肥後地方に、「ゲー」は北部一帯に、また「ケ」は、南部一帯に存立する。(九)

九州総括・全域に、イデが分布。両豊では、イジ・ジュが普通。また別に、両肥・薩隅など西辺一帯に、イカラ・カイがある。イカイは大隅に多い。(九)

福岡・バスカラ行クのように、經由・手段を示すカラは三藩郡大木町・三井郡小郡町・朝倉郡把木町で聞かれた。(九)

佐賀・經由・手段を示す「で」もあるが、カラで代用することも全県的である。例、バスで来た↓バスカラキタ。(九)

長崎・經由・手段の「で」にあたる旨い方は、県下一般にカラが使われる。長崎・上五県のカイ、福江のカンなども同じ系統のことばであろう。(九)

大分・具格はXデ(Xジュ・Xジ)。東国東ではXカラを用いることがある。船カラ往クのごとくである。他の地域でも、カチカラ往ク(徒歩で往く)だけは、化石的に言う所が多い。(九)
熊本・(深)・カラが手段を示すことがある。バスカラクル(バスで来る)。(九)

宮崎・經由・手段「で」は、県内一般に「デ」を使うが、その訛音「ジュ」もある。注目すべきは、西諸県郡の須木の「カラ」であって、恐らくここだけであろう(少年層は「ジュ」)。(九)

鹿兒島・宮崎南部・カラ 共通語の「から」に見られる用法のほか、往來の手段を示す。例、テンシヤカラキタ「電車で来た」。しかし少年層では共通語の影響を受けてか、テで往來の手段を示すことが多くなつて来た。(九)

鹿兒島・経由・手段「で」 バスカラ行クのカラは中年・老年に聞かれるが、若い層はそれをテに替へつつある。飯はカラが優勢。(九)

奄美大島・「ジ」動作の行われる場所、または場面を表わす「で」に当る(このジはテの変化でテである)。

十 ストラジ アシビ。(外で遊ぶ)。

この「ジ」は方向の意味も含んでいるが、方言の「ナンテ、」は方向の意を含まない「において」の意である。(コ)

〔や〕(並立)

福岡・テロン(久)(井)(山)、ケテ(池)、ヤラ(久)(井)(藩)(浮)(早)二個以上の物を併挙する場合に各々その物の名の次に加えて何々等の意を表わす。例えば、木ヤラ竹ヤラ持テ来テ。筆テロン紙テロン買ウテなどの如し。(福方)

佐賀・(北)。

クサバ キーヤレ トイヤレ イソガシカ モン(草を切るやら取るやらして忙しいもの)。

いわゆる並列の機能をになうものである。(九)

佐賀・(北)。

リンゴテロン ミカンテロン イッチョン スカン(りんごとかみかんとか少しも好かない)。

これも、並列の機能を持つて立つ。少年層にあつては、「ーテ」のようにおこなわれるのが普通である。(九)

対馬・テロ ……とかと、……じゃと。

近頃ワ無線電信テロ チュウモンガ出来テ。

アノ人ワ イツモ面倒ナントオ旨ウ人テ、此頃モマタ 何

テロカンテロ旨ウトル。(ツ)

奄美大島・並立助詞、共通語の「——カーカ」「——カー」は方言でも全く同様である。(コ)

〔より〕(比較)

福岡・標準国語では、「より」「よりも」と用いられるが、九州では「モ」よりも、むしろ「ガ」が多く用いられる。(福方)

長崎・ヨルカモ(比較)

ソルヨルカモヨカ（それよりも好い）。

働コウヨルカモ寝トレ（働こうより寝ていよう）。（長方）

〔から〕（起点）

九州総括・距離・時間の「から」は標準式の外に「カル」が多く聞かれ、「カリ」「カイ」もある。また、手段を表わす「女カラ負クル」などは普通であるが、「船カラ行ク」などは使用度が半減している様だ。（九〇）

大分・（長）・イカラ（カル）・ガラ（ガル）

「から」は、種々分化した意味機能のもとにおこなわれるが、ここでは、動作・作用の起点を表わす用法の場合に限ってとりあげる。

ガツコーカラ ハンミチ アル（学校から半里ある）。

この「カラ」は、空間的起点を表示する。ところで、時間的起点を表示する場合も、若い層では、「カラ」を用いるのが普通であるが、だいたい中年層以上では、

アサガラ ハタレーチョツタ（朝から働いていた）。

マエガラ ソゲ イーヨツタ（以前からそう言っていた）。

のように、「ガラ」を用いるのが普通である。「ムカシガラ」「キ

ヨネンガラ」「モトガラ」とあって、空間的起点を表示する「カラ」との区別が明らかである。（九）

本稿における今回の資料蒐集ならびに執筆は鎌田良二、吉井貫子が担当した。